

がんばる

Chubu

観光地域づくり編

昇龍道の中部エリアで展開される「観光地域づくり」を紹介する特集。

今回のエリアは岐阜県の飛騨古川。外国人旅行者を魅了するサイクリングツアーを成功させた戦略や、地域の協力を得てクールな田舎づくりを目指す(株)美ら地球の活動を紹介する。

“なんもない”里山に可能性を見出し クールな田舎をプロデュース



日本人には当たり前の光景が、外国人を虜にする観光資源になった

里山の日常を自転車で巡るツアー

高山の奥座敷と称され、飛騨のもう一つの古い町並みとして知られる「飛騨古川」。周囲は北アルプスの支脈の山々に囲まれ、緑豊かな自然とともに歴史的景観や伝統文化が脈々と受け継がれている町でもある。

その飛騨古川に、世界80カ国から毎年数千人の外国人旅行者を集める人気のサイクリングツアーがある。自転車で観光地を巡るようなものではなく、地元の人たちが暮らす「なにげない里山の日常」にお邪魔するというもの。農村に佇む古民家、田んぼのあぜ道、小

学生のランドセル姿など、日本人には見慣れた光景が、異文化を体験できるまたとない機会として外国人たちを魅了している。

世界最大の旅行口コミサイト「トリッ

プアドバイザー」で、コメントを寄せる参加者の99%が絶賛するこのツアーは、(株)美ら地球が実施する着地型ツアー事業「SATOYAMA EXPERIENCE」の1つで、「飛騨里山サイクリング」という。

コンサル会社と世界放浪を経て飛騨古川へ

美ら地球の代表取締役を務める山田拓さんは、異色の経歴の持ち主だ。奈良県出身で、大学院を修了後、外資系コンサルティング会社に就職し、ニューヨークで勤務。その後、米国以外の文化にも関心



を持ち、パリのコンサルティング会社に転職した。しかし、先進国の浪費社会ぶりや大企業のビジネス一辺倒な価値観に「こんなライフスタイルがいつまでも持続可能なのだろうか」と疑問を抱くようになり、いろいろな国を見てみようとして30歳を前に世界放浪を決意。夫婦で南米・アフリカを中心に約2年間の旅に出た。



コメ文化のない国の人にとっては
ただの田んぼも興味深く映る

バックパッカーとして旅の経験を重ねていくうちに、グローバルカンパニーで頑張っている評価よりも、自然や文化が周りに存在し、それに適応したライフスタイルに惹かれるようになり、田舎で暮らしてみようと2006年に帰国した。長野県を中心に移住先を探していたが、なかなか見つからず困っていたところ、知人の伝手で飛騨古川というまさに自分たちが求める田舎に出会うことができた。2007年、山田さんは前職と世界を旅した経験を生かせる飛騨市観光協会の戦略アドバイザーに就任し、飛騨古川の中心市街地の古民家を拠点に美ら地球を設立した。

立ち上げのきっかけは“仕方なく”!?

観光協会では、「世界に通じる飛騨を目指して」をスローガンに掲げ、外国人旅行者の誘致に力を注ぐ方針を打ち立てていた。この方針に基づき、山田さんは基本計画の策定、英語サイトの構築、プログラム開発などの準備を進めていた。

しかし、これらを実行する主体は現れなかった。世界各地で参加したツアーから、この部分を取り入れれば面白い飛騨バージョンができると山田さんはイメージできるが、同様のツアーに参加したことのない人たちにとっては、構想の具現化は困難な話だった。「こうなったら自分でやるしかない」と、山田さんは戦略アドバイザーとしての役割に区切りをつけ、飛騨里山サイクリングに着手。クールな田舎をプロデュースする最初の一步がはじまった。

飛騨里山サイクリング成功への軌跡

山田さんは、ツアーのターゲットを欧米豪からの旅行者に絞ることにした。マーケティング調査が表す数字と、世界を放浪中に得た自らの感覚値から、集客につながると判断した。

2009年9月から2カ月間の試験運用を行った結果、付加価値や参加者の満足度を上げるために、翌年7月の本格始動からはツアーにガイドをつけることにした。しかし、人口減少が著しい田舎においてベンチャービジネスを立ち上げるには、人材の確保が大きなネックになった。その苦労は今でも続いているが、現在の10名程のスタッフは、英語が堪能なだけでなく、1年以上の海外生活経験を持っており、外国人に対する

コミュニケーション能力に長けた人がほとんどだ。

ツアーはスタンダード(3.5時間、7,600円)とハーフ(2.5時間、4,900円)のコースを設定。日本人には割高感があるが、世界基準からすると一般的な価格だ。告知はインターネットとエージェントセールスで地道に開始。サイトはターゲットを絞るため、英語と日本語のみにしてあえて間口を狭めることにした。しかし、それだけではなかなか集まらないので、高山の陣屋に赴き外国人旅行者に直接声をかけ、参加者を集めていった。

当初は行政の支援制度も利用していたが、高山で飛騨の酒文化に触れられるツアーを増やすなど、運営は徐々に安定し、2015年には支



雨や雪でサイクリングツアーが催行できない日でも稼ぎを得るため、他のツアーも拡充していった

援に終止符を打ち自立を果たした。さらに、ツアーに満足した参加者が次々と口コミサイトに投稿するようになり、参加者は年々増加。飛騨里山サイクリングだけで2017年度は4,000人にも及んだ。参加者のうち80%は外国人で、さらに外国人のうち80%が欧米豪の人たちと、ターゲットを絞る戦略も成功している。

3つのコンテンツが揃うことで満足度を獲得

現在、トリップアドバイザーにアクセスすると、SATOYAMA EXPERIENCEには900件程の口コミが寄せられ、そのほとんどが5つ星という高い評価を得ている。山田さんは、「私たちガイド、地域そのもの、地域で暮らす人たち。この三拍子が揃っていることが満足の源泉だと思う。地域と住民に魅力があってもガイドがいなければその良さは感じられないし、ガイドがいても地域や住民に魅力がなければ満足度は高まらない」と言う。

住民たちにも大きな意識変化が生まれている。「なん



採れたての野菜や果物を振舞ってくれる住民も多い

もない」と言っていた人たちが、外国人からこの地の素晴らしさや喜びを直接聞くことで、地元に対する誇りが芽生えてきた。ツアー中にすれ違う住民たちは、参加者に積極的に声をかけてくれるそうだ。

“住んでよし、訪れてよし”クールな田舎を目指して

地元企業と連携してWin-Winの関係を築く

山田さんをはじめ美ら地球のスタッフはほとんどが「よそ者」。飛騨という地域において事業を行うには足りない部分が多く、逆に美ら地球が地域に提供できる付加価値もある。そこで、互いを補いWin-Winの関係を築くため、地域と連携した事業も行っている。



長野の白馬にスキーに来るオーストラリア人が高山へも足を延ばす際、スノーシューツアーに参加するケースが多いという

飛騨里山サイクリングが開催できない冬季向けに、奥飛騨温泉郷ではじめたのがスノーシューツアー。冬場の客を増やしたい路線バス会社と、外国人旅行者を呼び

込みたいロープウェイ会社との思惑が一致し実行に移すことになった。

また、2016年のJR高山駅リニューアルを機に、高山市の老舗食品会社と組み、駅1階に「iCAFE TAKAYAMA」をオープン。飲食、ツアーデスク、コインロッカー、荷物預かりの4つの機能に加え、飛騨高山の玄関口という立地を生かしたマーケティング拠点としての役割も担っている。ここで得た旅行者の動向データは、食品会社のネットワークを通じて旅行関連事業者などに還元。それにより、地域全体の満足度が上がっていくことを目指している。



ツアーデスクでは、SATOYAMA EXPERIENCEのツアー予約や飛騨高山のホットな観光情報が入手できる

よそ者たちによる地域イノベーション

美ら地球の事業はさらなる広がりをみせている。飛騨古川の古民家の調査・手入れを行う空き家事業では、宿泊施設などにするための準備を進めている。ツアーメニューもカルチャー系やウォーク系をさらに充実させようと新たなメニューを開発中だ。また、地域のさまざまな主体から連携の声もかかっており、企業だけでなく高校とのプロジェクトも進行中だ。

事業拡大の根底には、地域課題の解決に協力したいという思いがある。そのために美ら地球では4つの「happy」の実現を目指している。

4つのhappy	
旅人のhappy	期待以上の、その土地ならではの魅力に触れられる
地元企業のhappy	旅人の「もう1泊、もう1食」が生まれる
住民のhappy	自分の住む場所に誇りを持てる
ワカモノのhappy	やりがいのある仕事と、新たなライフスタイル

山田さんは、「地域の協力があってこそ、事業が順調に成長してきたので、“自分たちのこと”と“地域のこと”、これはセットとして取り組まなければならない」と言う。この考えから、飛騨里山サイクリングはこれ以上拡大しない方針だ。参加者が増えすぎて住民の日常生活に迷惑をかけてはならないと、地域とのバランスに配慮している。



文化体験や町歩きメニューも、地域の別組織が日本人向けに行っているの、参加対象を外国人のみにし客層が重ならないようにしている

日本と世界の田舎をクールにする活動

外国人旅行者を魅了する田舎は日本中にたくさんあるが、観光分野においてマネジメントやマーケティングができる人材が圧倒的に不足している。山田さんは人材育成の必要性を強く認識し、富山県の観光人材育成事業の研修生を3年前から受け入れている。研修期間は6カ月、1期生の一人はすでに事業立ち上げに至っている。

飛騨以外の地域に協力することで、山田さんは5つ目の「他地域のhappy」に気づいた。そこで、前職で培ったスキルを生かし、地域の企業・団体・自治体向けにツーリズム全般、顧客満足度向上、新規事業立ち上げなどのコンサルティングを手掛け、現在支援する地域は8つにも及ぶ。また、年間50回程の講演依頼が舞い込み、日本だけでなく台湾やベトナム講演も行った。この冬にはブータンにも行く予定だ。

他地域のhappyが実現するには、「地域の人が必要ならなければならない」という意思を持ち続けることと、それをやりきれない人材を確保することが課題だ」と山田

さんは言う。最初は頑張っている途中で挫折してしまうケースを目の当たりにしてきたからだ。

田舎における新たなライフスタイルの提案者を目指す

「飛騨をクールに!」「日本の田舎をクールに!」「世界の田舎をクールに!」をミッションとする美ら地球が描く未来は、田舎に人が来るだけでなく、田舎に住み続ける人が増えること。都会より田舎のライフスタイルを誇らしく思う、そんな感覚を持った人たちが増えるためにも、田舎をクールにし、そこで楽しく暮らせるプラットフォームを構築することを目指している。

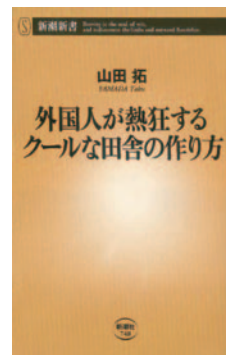
飛騨古川からスタートした美ら地球の取り組みは、飛騨地域へ、日本各地へ、そして世界へも広がった。飛騨里山サイクリング立ち上げから10年足らずでここまでの成果を上げてきた美ら地球。5年後には、10年後には、どんな進化を遂げているのか、ますます期待は膨らむ。

文：総務部 櫻井 景子

取材協力：(株)美ら地球 代表取締役 山田 拓 氏

写真提供：SATOYAMA EXPERIENCE

(株)美ら地球ホームページ：<https://www.chura-boshi.com/>



本特集の参照文献。地域創生や地方移住に関心のある方は、是非手に取ってみてください

日本の美しさを再認識！ 飛騨がもっと好きになる旅に出かけよう!!

暮らしを旅するガイドツアー 飛騨里山サイクリング

スタンダード

飛騨古川の古い町並みから農村集落を抜けていくと、次第に美しい里山が見えてきます。地元野菜の並ぶマルシェ、点在する巨大な古民家、広がる田んぼとそれを囲む山々。全長22kmのルート上には、人々の暮らしを感じられるポイントが随所にちりばめられています。ガイドブックには載っていない日常の美しさを感じられるツアーです。

ハーフ

飛騨古川の古い町並みから農村集落まで、全長12kmのルートはすべてフラットで坂道はありません。途中で立ち寄る田畑や大きな神社、地元の人が汲みに来る湧き水スポットなどを巡ります。ほんの少し町のはずれを楽しんでみたい自転車ビギナーやファミリーにおすすめのツアーです。



開催期間

2018/3/20～2018/12/20、
2019/3/20～2019/12/20

時間

スタンダード 約3時間30分
①09:00～12:30 ②14:00～17:30
※10/16～12/20は①のツアーのみ

ハーフ 約2時間30分

①10:15～12:45 ②14:00～16:30
※②のツアーは10/16～12/20の期間限定

催行人数 定員8名 最小2名

料金 **スタンダード** 7,600円/人
ハーフ 4,900円/人



ふかふかの雪の上を散歩しよう 飛騨里山スノーシュー

里山スノーシュー

雪で覆われた集落や棚田、森の中をスノーシューで散策します。ごろんと雪の上に寝転び、葉が落ちた木々の隙間から空を楽しむのもおすすめです。音に溢れた日常から離れ、森の静けさに耳を傾けていると、普段では気づかない自然の音が聞こえてきます。自然と向き合うことで見えてくる里山の冬の暮らし。人と自然が、いかに近い場所で共生しているかを感じられるツアーです。

新穂高スノーシュー

舞台は標高1,300mに位置する鍋平高原。静寂の世界でさくさくと雪を踏みしめる音、風の音、鳥の鳴き声が聴こえてきます。キツネやウサギといった動物たちの可愛い足跡を目にすることもあります。壮大なアルプス山脈を眺望できる新穂高。ロープウェイを利用して、手軽に白銀の世界を五感で楽しめるツアーです。



開催期間

里山スノーシュー 2019/1/5～2019/2/28
新穂高スノーシュー 2018/12/22～2018/12/30、
2019/1/6～2019/3/4

時間

里山スノーシュー 約3時間30分 13:00～16:30
新穂高スノーシュー 約2時間40分 10:20～13:00

催行人数

里山スノーシュー 定員7名 最小2名
新穂高スノーシュー 定員10名 最小2名

料金

里山スノーシュー 7,000円/人
新穂高スノーシュー 9,300円/人



ツアー内容の詳細・予約については、
SATOYAMA EXPERIENCEのホームページ(<https://satoyama-experience.com/jp/>)をご覧ください